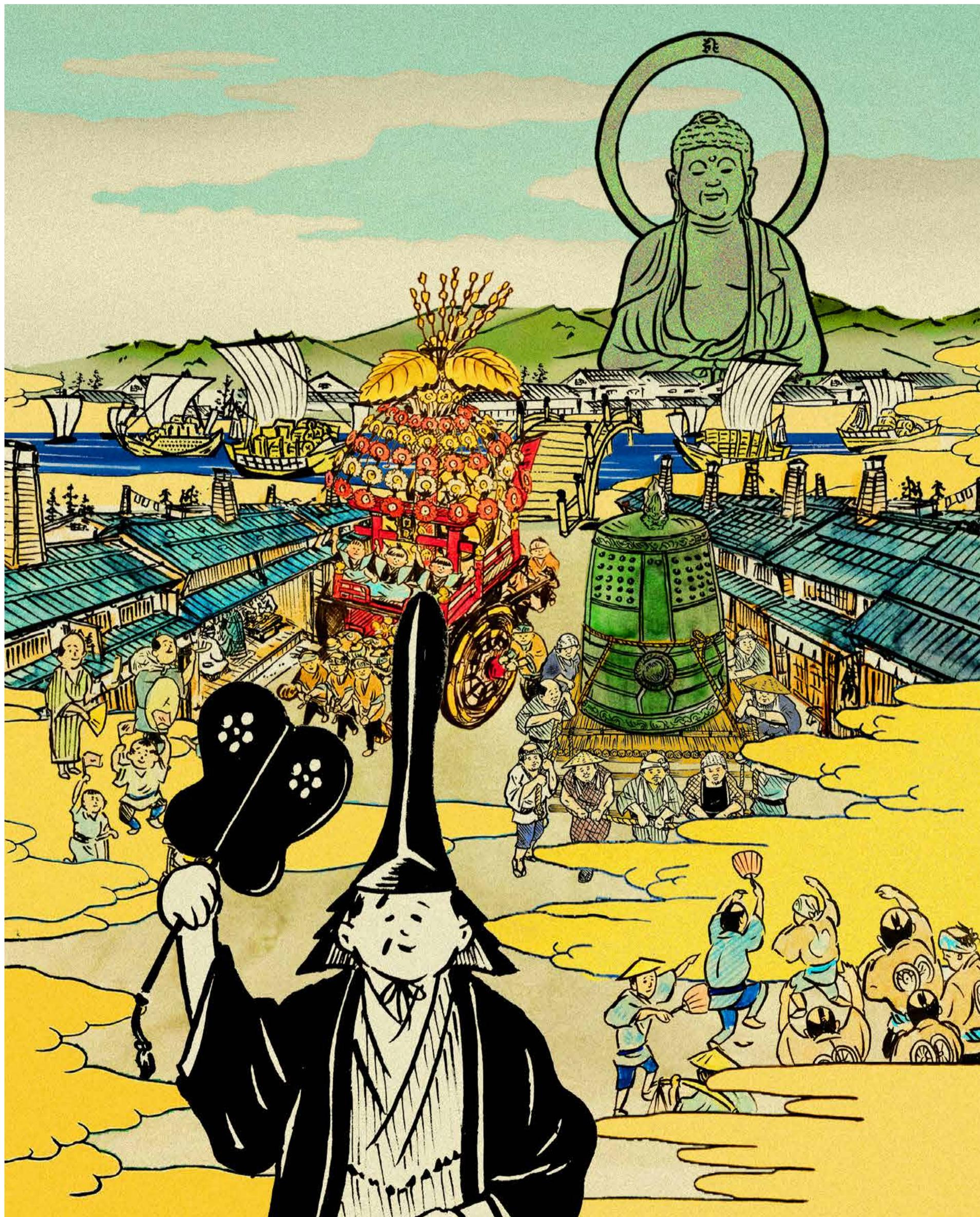


# TAKAOKA

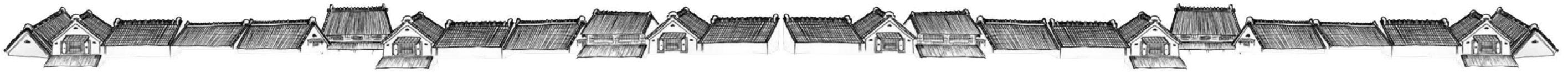
まちも、ものづくりも、ライバルはご先祖様。



富山県高岡市が誇る2つの「日本遺産」ストーリー

加賀前田家ゆかりの町民文化が花咲くまち高岡 一人、技、心—  
荒波を越えた男たちの 夢が紡いだ異空間 ～北前船寄港地・船主集落～

高岡発瓦版:総集編 TAKE FREE



富山県内唯一の国宝・瑞龍寺は、前田利長の菩提寺で、三代当主・利常が建てた曹洞宗の寺院。



前田利長が開いた全屋町は高岡銘物発祥の地。石畳とさまのこ(千本格子)が美しい伝統的な町並み。



高岡御車山祭では、「動く美術館」と呼ばれる豪華絢爛な7基の山車が、優雅な囃子とともにまちを練り歩く。



物語1

### 加賀前田家ゆかりの町民文化が花咲くまち 高岡 一人、技、心

高岡は開町以来、順調に発展したまちではなく、じつは当初から波乱万丈の運命が待ち受けていました。開町から5年後には城主の前田利長が亡くなり、さらに、その1年後には江戸幕府の二国一城令によって高岡城が廃城になるなど、城下町・高岡は、大きな存続の危機に直面します。しかし、利長の高岡への思いを受け継いだ前田家三代当主・利常は、町民の他所転出を禁じ、物資の集積地を整備するなど、次々と産業育成策を打ち出しました。やがて、高岡は「加賀藩の台所」として飛躍的に発展していきます。武士ではなく、町民が主役のまちとなり、今日の礎を築いていったのです。

平成27年4月には、文化庁が認定する「日本遺産」に、高岡市が提案するストーリー「加賀前田家ゆかりの町民文化が花咲くまち高岡一人、技、心」が、全国18件のうちのひとつとして認定されました。利長が高岡を開町し、多くの先人たちの努力によって花ひらいた町民文化。それらの伝統は決して過去のものではなく、いまも高岡の人々の日々の暮らしや心のなかに深く根をおろし、輝いています。困難を乗り越え、時代を切り開いた人々の熱い物語を、さあ、見ていきましょう。

↓【詳細は頁04へ】

# ライバルはご先祖様。高岡の繁栄につながる、2つの物語。



## 高岡市とは

富山県西部の中心のまち、高岡市。人口は約170,000人。北陸を代表する穀倉地帯を背景に、北は富山湾に面し、雨晴海岸からは立山連峰の大パノラマが望める、自然環境に恵まれた商工業都市です。

加賀前田家二代当主  
**前田利長**  
TOSHINAGA MAEDA



まずは私が、まちの成り立ちを案内しよう。

明治時代～



高岡市伏木気象資料館(旧伏木測候所)は国の登録有形文化財で、明治16年に廻船問屋の藤井能三らが建設。

桃山時代～



雲龍山勝興寺は文明3年に砺波郡土山で創建、その後現在地へ。本堂などが国の重要文化財に指定されている。

奈良時代～



大伴家持が国守として赴任した越中国庁は、現在の勝興寺周辺にあったと考えられ、境内には家持の歌碑も。

物語2

### 荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 北前船寄港地・船主集落



江戸時代の海上交通は経済の大動脈。中でも日本一の米市場の大阪と海産物が豊かな北海道を往復した北前船は花形航路でした。伏木に寄港する北前船が増え、船宿、商店、倉庫業の店などが集まり、まちは大いに繁栄します。次第に伏木や高岡でも船を持つ船主が増え、最盛期には大小、30軒ほどの廻船問屋がありました。

北前船で1往復1億円とも言われる莫大な利益を手にした船主たちですが、明治時代には蒸気船や鉄道が登場し、北前船の時代は徐々に終焉へ。しかし船主たちは実業家や政治家に転身。藤井能三に代表されるように、伏木港やまちな近代化に私財を投じて尽力しました。

平成29年4月に文化庁から日本遺産の認定を受けた物語「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間」北前船寄港地・船主集落」に、平成30年5月、高岡市内の文化財が追加認定されました。

↓【詳細は頁06へ】

わしは慶長14年(1609年)、この地に高岡城を築き、高岡のまちをつくった加賀前田家二代当主の前田利長じゃ。前田家は徳川家も恐れる最大の石高を誇る大名じゃぞ。いまでは北陸新幹線で東京と高岡間は約3時間。気軽に行き来できる、いい時代になったのう。

さて、わしは高岡を開町した際に、各地から多くの商人・職人らを迎い寄せ、様々な特権を与えたのじや。彼らの奮闘により高岡は「加賀藩の台所」といえるほどの商工都市に発展していくのじや。特に7人の腕利きの鋳物師を呼び寄せて開業させたことが高岡の産業の始まりなんじや。現在も、高岡は全国の銅器生産のトップシェアを誇っておるが、伝統的でありながら新しい価値をもった鋳物製品を次々に世に送り出す高岡は、ものづくりのまちとして、世界でも高く評価されているのじや。

高岡には、国宝をはじめとする文化財はもろろん、当時のままの町並みも多く残されておる。澄んだ空気に包まれて歩き、人々と触れ合い、工芸体験などをしてみると、まちの誇りも営みも、決して過去のものでなく、いまもいきいきと受け継がれているのを実感できるはずじや。お腹がすいたら、一年中豊富な海の幸をたっぷりと。四季折々の伝統的な祭りに触れるのも、富山湾越しに雄大な立山連峰を眺めるのも、癒しの効果絶大じやよ。

そうそう、日本海側の真ん中の位置にあり、北前船で大いに栄えたみなと町、高岡市伏木のことも紹介しよう。伏木は古くは奈良時代、大伴家持が天平18年(746年)から5年間、越中の国守として赴任した由緒あるところ。国府、つまり、県庁所在地じゃった。万葉集の家持の歌

#### 日本遺産とは？

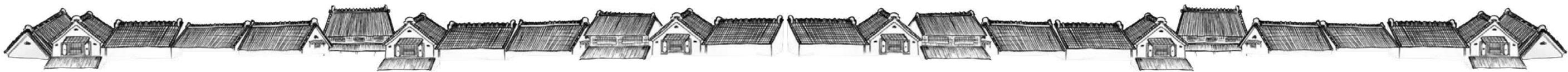
日本遺産は、文化財などを活用して、地域の歴史的魅力や特色を物語として国内外に発信し、地域活性化を図る取り組みです。単体の文化財ではなく、それらをつなぐ物語が重視されているのがポイント。高岡市の物語を含む、全国の104の物語が日本遺産に認定されています。



473首のうち、なんと、223首が越中での赴任中に詠んだもの。元号の令和の元になった「梅花の宴」を開いたのは、家持の父の大伴旅人。旅人に大きな影響を受けて育った家持が、越中の美しい自然に出会い、歌人として一気に成長していった。まさに、高岡市伏木は、万葉集と令和のゆかりの地なのじやな。

のちにみなと町として栄えた高岡市伏木は、能登半島に包み込まれた富山湾に面した地。二級河川である小矢部川と庄川川のふたつの川の河口にあり、上流の砺波地方は加賀藩最大の穀倉地帯。江戸時代には米をはじめ、様々な産物が集まってきた加賀藩の重要な港じや。川や海には、大小の船が行き交い、やがて、北前船の寄港地として発展したのじや。

この高岡発刊版は、高岡の魅力の謎を解き明かす「2つの物語」が中心になっておる。というのも、この2つの物語が文化庁の「日本遺産」ストーリーに認定されておるのじや。なんとも名譽なことじやわ。わしや三代の利常亡き後もその魂を受け継ぎ、高岡の繁栄のために尽力した町民や職人たちの物語を、とくとご覧あれ。



物語 1

日本遺産

「加賀前田家ゆかりの町民文化が咲くまち高岡 一人、技、心」

高岡が、奇跡的な大転換に成功したって？

開町まもなく、最悪のピンチを 最高のチャンスに変えた、お殿様と町民たちの物語。

Story.3

「加賀藩の台所」として 隆盛を極めた高岡

絢爛豪華な装飾を まちごとに競い合う御車山は、町民の心意気そのもの



高岡町民も利常の保護と期待に応え、高岡は商人・職人のまちとして、着実に歩みはじめました。 鋳物づくりでは最初は、鍋・釜などの生活用具、農具の鉄器具類が多くつくられていましたが、次第に、香炉・花瓶・火鉢・仏具などの文化的な品物の需要が高まり、装飾に富んだ製品がつくられるようになりました。 銅器製造が盛んになると、北前船パイ船で全国各地に販路を確保し、海外貿易にも進出するようになります。また、伏木港は越中西部の物資の集散地であり、北前船の寄港地としても栄え、高岡は「加賀藩の台所」として隆盛を極めました。 そうして財を成した豪商たちが絢爛たる装飾を競い合ったのが、御車山祭です。7基の御車山には彫金・漆工など高岡の伝統工芸の粋を集めた豪華な装飾が施されました。利長が町民に分け与えたと伝わる御車山。当初は素朴なものだった山車が、長年、町ごとに競い合うなかで現在のようにな豪華なものになりました。ともにまちの発展に貢献してきた町民の心意気を象徴しています。

Story.4

町民の心意気と、ものづくりの魂をこれからも

開町以来、熱く燃えるものづくりへの思いは、最先端のデザインへとつながった!



デザイナーとのコラボによる最新商品のほか、ものづくりの現場を体験し、職人と交流するツアー「高岡クラフツリズム」も人気。

高岡の発展は町民自身が担い手となり、地域に富を還元してきたことが特長です。近代以降、明治の文明開化といった全国的な時代の変遷を経ても、町民にとっては商売継続の望みを失うことなく、むしろ実力を存分に発揮でき、長年待ち望んでいた好機としてすら捉えていました。 事実、維新後は県庁の所在地ではないためのハンディキャップを負いながらも、常に日本海側屈指の商工都市として気を吐いてきました。特に、鋳物業などの伝統産業は、繊細な技術や現代のライフスタイルに合った最先端のデザインで、全国的にも注目を集めるようになっていきました。

現在でも、町割り、街道筋、町並み、生業や伝統行事などに町民の歩みが独特の気風として色濃く残されている高岡。競い合いながら発展を続けてきた町民の心意気は、DNAとしていまも人々に受け継がれています。歴史と文化の保存や継承だけでなく、それらを活かした、新たな文化や魅力の創造に、力強い歩みを続けています。

Story.1

150日で高岡城を築城、しかし、6年で廃城へ

利長の世界や一国一城令によって、城下町は消滅の危機へ



高岡は北陸を代表する米どころとして知られる砺波平野、射水平野を背後に控え、北は富山湾に面し、雨晴海岸からは海越しに3000メートル級の立山連峰を望むことができる、豊かな自然や食に恵まれたところ。古くは旧石器時代まで遡る人々の営みがありました。 現在の高岡の基盤は、近世初期に形成されました。加賀前田家二代当主の前田利長は、若き頃に山城(守山城)から俯瞰し、この高岡の地が要害としての軍事的な機能だけでなく、水陸交通の要衝として経済的な機能を合わせ持つ理想的な地であると見抜いたとされます。そして、慶長14年(1609)に、高岡城を築城しました。利長はこの地で築城できる機会を心待ちにして、驚異的な早さで建設工事を進めます。そして、築城開始からわずか150日ほどで入城するに至りました。 利長は城下町の一角に、資材の集積と調達を行うための拠点(木町)を設けたり、砺波郡の西部金屋から7人の鋳物師を招き、鋳物づくりを行う鋳物師町(金屋町)をつくりました。金屋町をはじめとした町人には地租や各種の税金を課さない厚い保護や特権を与え、城下町としての繁栄を図ったのです。 しかし、高岡城下町を創建して、その後、400余年に渡る高岡市の発展の土台を築き上げた利長でしたが、在城わずか5年で世界してしまします。家臣団はこころく金沢に引き揚げ、さらに翌年の二国一城令により、高岡城は廃城という過酷な運命へ。城下町の歩みを始めていた高岡は、たちまち絶望の淵に突き落とされたのです。

ストーリーの構成文化財

高岡市の中心部から市内のあちこちに広がる貴重な文化財は、まちの歴史を現代へと伝える宝物。現地を訪ねて、大切な物語の一端に触れてみてはいかがでしょうか。

- ①瑞龍寺 ②前田利長墓所 ③五福町神明社本殿 ④大手町神明社拝殿 ⑤高岡城跡 ⑥前田利長公御親書 ⑦高岡御車山 ⑧高岡御車山祭の御車山行事 ⑨と四兵衛頭彰碑(弥真進大人命旧跡) ⑩明和八年製高岡町図 ⑪山町筋重要伝統的建造物群保存地区 ⑫菅野家住宅 ⑬筏井家住宅 ⑭土蔵造りのまち資料館(旧室崎家住宅) ⑮金屋町重要伝統的建造物群保存地区 ⑯仁安の御繪旨 ⑰前田利長書状 ⑱有礎正八幡宮(本殿・釣殿・拝殿及び弊殿) ⑲銅造阿彌陀如来坐像 ⑳高岡鋳物の製作用具及び製品 ㉑御印祭 ㉒旧南部鋳造所キュボラ及び煙突 ㉓梵鐘龍頭木型 ㉔戸出御旅屋の門 ㉕勝興寺 ㉖伏木港(伏木浦) ㉗伏木北前船資料館(旧秋元家住宅) ㉘棚田家住宅 ㉙能松家住宅 ㉚有藤家住宅 ㉛高岡商工会議所伏木支所 ㉜伏木気象資料館(旧伏木側候所庁舎・測風塔) ㉝丸谷家住宅 ㉞佐野家住宅 ㉟清都酒造場 ㊱越中福岡の菅笠製作技術 ㊲菅笠問屋の町並み ㊳吉久重要伝統的建造物群保存地区

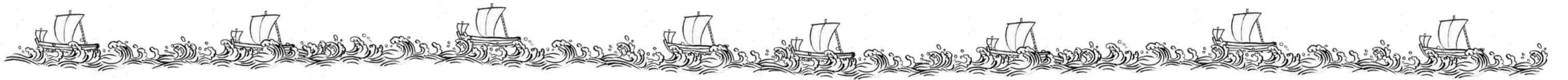
Story.2

武士のまちから、町民のまちへの大転換

利長が抱いた希望を受け継ぎ、まちを存続させるため商業政策を次々と打ち出す!



城がなくなれば、城下町は存在の意義を失ってしまいます。高岡は、都市として日が浅く、町を存続するにはそれ相応の対策がなくてはなりません。そこで、三代当主・前田利常は、存続が危ぶまれた高岡のまちを、活を入れて立て直します。高岡町民の他所転出を禁止し、その上で、布御印押人を置くことで高岡を麻布の集散地としました。さらに、御荷物宿・魚問屋や塩問屋の創設を認め、城跡内には米蔵と塩蔵を設置するなど、商業都市への転換策を積極的に講じていったのです。 利常は、利長が高岡に相当の希望をかけていたことを知っていました。だからこそ、商業都市への政策転換を進める上でも、利長が築き上げた町割りなどを活かした形で行ったのです。異母弟である自分に家督を譲ってくれた利長への恩義を深く感じ、利長の菩提のために壮大な伽藍建築を持つ瑞龍寺を造営しました。また、異例の規模を誇る墓所もつくっています。これは、利常自身のみならず、町民に永く利長の遺徳をしのばせ、それと併せて町の繁栄を願う気持ちも込めて建立されたものです。 また、利常は高岡が軍事拠点としての機能を失うことに対する危惧を持つていました。高岡城内には、平和的利用として米塩の藩蔵を建てることよって幕府に干渉の口実を与えず、いざというときに備えて、城の郭や堀は完全な形で残すことに成功していったか、わかります。 その姿は今日でも変わらず、利常の優れた経営手腕は、現在も高岡市内に数多く残る関連文化財群に垣間見ることが出来ます。



「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間  
〜北前船寄港地・船主集落〜」

# 1往復で1億円。

## 儲けは地域に還元する

### 国際感覚と

### 先見の明に優れた

### 船主たちの物語。

へいつ、北前船の船主って、最先端の人だったの？



年貢米が集まった吉久には、  
今も往時の面影が残る。

## Story.2

### 北前船が寄りたくなる港、 伏木 —加賀藩の物流拠点—



北前船の航路ができる前から、琵琶湖周辺の商人が共同で船を持ち、北海道の物を敦賀までは船で、そこから陸路で運び、莫大な利益を上げていました。一方で前田家三代当主・前田利常が、年貢米の運搬のため、寛永15年(1638年)、本州の西半分を回り、直接大阪に至る航路を開拓。このルートが台わさり、大阪と北海道をすべし、船でなく「北前船」の航路が完成したのである。

ここ高岡市伏木は、北前船が出現した頃はまだ、物流の天拠点。小矢部川と庄川という大きな川の河口に位置し、流域から多くの産物が集積しました。中でも、重要な産物の年貢米は、伏木の対岸であった吉久へ集められ、吉久から伏木港へ、そして大阪へ出荷されました。吉久の町並みには今も昔の面影が残ります。もともと北陸には「地廻り船」という中小規模の船主が多かったことが素地となり、やがて伏木に寄港する北前船が増え、廻船問屋のほか、船宿、商店、倉庫業の店なども集まり、町は発展。伏木でも自ら船を持ち、廻船問屋として力を持つ商人が増加。最盛期には、大小合わせて30軒ほどの廻船問屋があり、栄えました。

## Story.3

### 北前船が運んだもの —米の道・昆布の道—

富山に昆布食文化をもたらしたのも、  
北前船だった。



北前船が運ぶ主要な積荷は各藩の年貢米。日本海の側の大名は、日本一の米市場の大阪で米を売り、お金を得ました。高岡からは米はもちろん、鋳物類を数多く出荷。大ヒット商品の塩釜やニシン釜などの鉄製品、香炉や花瓶、仏具、釣鐘などの銅器も運ばれました。

北前船は大阪で木綿原料や繊維製品等を買込み、帰路、西日本の各港で、塩や鉄、紙船を安定させる重石も兼ねた石、人形、お菓子なども買い付け、生活必需品からぜいたく品まで、安く手に入る土地で買い付けては、次の寄港地で高く売り利益を得ました。

当時、船作が始まったばかりで、貴重だった藻も北海道へ。その帰りにニシンや昆布を購入。北海道で大量に獲れたニシンは、全国で栽培された稲や藍、菜種、綿などの肥料として、最大の利益を生み出しました。北海道の昆布が、伏木港で大量に荷下ろしされ、富山の昆布食文化を生み出したことも、北前船の豊かな恵みです。昆布巻き、蒲鉾や昆布、おにぎりのとろろ昆布まで、昆布がとれない富山で消費金額日本一の昆布食文化の背景には、北前船の存在が。最近では、「高岡昆布飯」や「高岡昆布スイーツ」など、新しいご当地グルメも売り出しています。

## Story.4

### 今に受け継ぐ企業家魂 —地域経済に尽くした北前船主たち

私財を投げうって、  
公共事業を行った  
船主たちがいた。



藤井能三は、日本海側初の西洋式灯台や日本初の私設測候所(現・伏木気象資料館)の建設、県内初の小学校、伏木小学校の創立など、私財を投じて数々の公益事業を行いました。

19世紀後期には鉄道や蒸気船(汽船)などの登場により、北前船は急速に終焉へ。通信技術の進歩で情報差による儲けが減少したことや、人造肥料の登場で肥料の需要が激減したことも、追い討ちをかけた。

そこで、伏木の多くの船主たちは、肥料会社や紡績会社、電力会社、銀行など、実業家に転身します。中でも地元経済の発展に貢献したのが、廻船問屋・能登屋の藤井能三です。能三は明治8年(1875年)三菱と交渉し、汽船の定期航路誘致に成功。私財を投げうち、伏木築港事業に専心し、伏木港は明治32年(1899年)に全世界と貿易ができる「開港場」となり、近代港として発展を遂げました。船主たちの気風は、時代の荒波の中でも、高岡の企業家たちの心に今も受け継がれています。

## Story.1

### 北前船は荒波を漕ぎ進む 「動く総合商社」だった!

大阪へ米を運び、  
北海道とも往復。  
1往復で1億円の利益が。



大正期の伏木港の様子。画像提供:高岡市立博物館

日本海を大きな帆を立てて進む木造船。北前船とは、江戸中期から大正期(ピークは幕末〜明治初期)まで、大阪から瀬戸内・日本海を経て北海道まで航行した交易船です。

江戸時代の海上交通は経済の大動脈。中でも150t積みもの大ききで、日本一の米市場の大阪と、海産物が豊かな北海道を往復した北前船は花形航路。北前船は各港で積荷を売買しながら往復したのが特徴です。

伏木の北前船は、旧暦の2〜3月に米を積んで大阪へ。帰りには雑貨類を満載し、寄港地で売買しつつ伏木へ帰港。次に、米や菓製品を積んで東北や北海道へ。帰路は昆布、魚肥、木材等を積んで旧暦の9〜10月に伏木へ戻りました。

1往復で、6千万円から1億円とも言われる利益を生んだ北前船は、まさに「宝船」。最新情報や文化も運びました。リスクを背負いつつ、土地のニーズを商売につなげ、メディアの役割も果たした北前船は、「動く総合商社」でもありました。



船給馬。航海安全の祈願あるいは無事航海を終えた感謝のため船主や船乗りが地元の神社に納めたもの。金刀比羅社(伏木湊町)「長栄丸」(1926年)画像提供:高岡市立博物館



### ストーリーの構成文化財

高岡市内各地や、海沿いの伏木、吉久などには、北前船の響でもたらされた建物や風情ある町並みが今も残ります。みなと町ならではの独特の雰囲気を楽しみながら、歩いてみませんか。

- ① 旧秋元家住宅 (高岡市伏木北前船資料館)
- ② 旧伏木測候所庁舎・測風塔 (高岡市伏木気象資料館)
- ③ 伏木神社
- ④ 伏木神社 春季例大祭の祭礼行事
- ⑤ 伏木帆柱起し祝唄 (地図上に表記は無し)
- ⑥ 勝興寺唐門
- ⑦ 吉久重要伝統的建造物群保存地区
- ⑧ 菅野家住宅
- ⑨ 高岡踴物の製作用具及製品